

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

ワークシートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重要な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重要な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用型	効能効果		
評価の視点	薬理作用		相互作用		重要な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化		用法用型	効能効果		
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ					
抗菌成分 (サルファ剤)	スルファメトキサゾール	外用がないので類薬のスルファメトキサゾール点眼(サイアジン)で代用					頻度不明(刺激感、眼結膜の発赤、結膜充血)	頻度不明(過敏症)			サルファ剤過敏症 既往歴					まれに全身使用と同じ副作用があらわれることがあるので、長期連用は避ける事。					
	スルファイミン	医療用医薬品としてなし																			
	スルファジアジン	テラジバスタ					頻度不明(菌交代現象、その他：内服、注射等全身投与の場合と同様な副作用)	頻度不明(過敏症)			サルファ剤過敏症の既往歴	・薬物過敏症の既往歴 ・光線過敏症の既往歴 ・エリテマトーデス		・疾病の治療上必要な最小限の期間の投与にとどめること。(耐性菌の発現等を防ぐため)		眼科用として使用しないこと。	・長期使用は避けること(内服、注射等全身投与の場合と同様な副作用発現)。			通常、症状により適量を1日1～数回直接患部に塗布または無菌ガーゼにのばして貼付する。	適応各種 本剤に感性的 ブドウ球菌属、 大腸菌 感染症 表在性皮膚感 染症、深在性 皮膚感染症、 外傷・熱傷およ び手術創等の 二次感染、び らん、潰瘍の二 次感染
	ホモスルファミン	配合剤のみ																			
殺菌成分	サリチル酸	サリチル酸	角質溶解作用・細胞間基質を溶解し・鱗屑の剝離を促進して角質増殖皮膚を軟化させる作用がある。防腐作用・微生物(白せん菌類など)に対して抗菌性があり、その防腐力、石炭酸に匹敵する。				頻度不明(発赤、紅斑等の症状、長期・大量使用で内服・注射等全身投与の場合と同様な副作用)	頻度不明(過敏症)			本剤に対し過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、未熟児、新生児、乳児、小児	・皮膚が化膿しているなど濃濁、び爛がひどい場合は、あらかじめ適切な処置を行った後使用。		広範囲の病巣に使用した場合、副作用があらわれやすいので注意して使用。眼下部には使用しないこと。	長期・大量使用で内服、注射等全身投与の場合と同様な副作用発現のおそれ。長期間使用しても症状の改善が認められない場合は、改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。			1.通常サリチル酸として、50%の絆創膏を用い、2～5日目ごとに取りかえる。2.次の濃度の軟膏剤又は液剤とし、1日1～2回塗布または散布する。小児：サリチル酸として0.1～3%、成人：サリチル酸として2～10%	1.皮膚・顔面・四肢の角質剝離。 2.乾癬、白癬(頭部透在性白癬、小水疱性斑状白癬、汗疱状白癬、頑癬)、皸風、紅色乾癬疹、紅色陰癬、角化症(尋常性魚鱗癬、先天性魚鱗癬、毛孔性苔癬、先天性手掌足底角化症(腫)、ダリエー病、遠山連筒状乾癬疹)、濕疹(角化を伴う)、口囲皮膚炎、掌跖膿疱症、アトピー性皮膚炎、ざ瘡、せつ、腋臭症、多汗症、その他角化性の皮膚疾患	

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

ワークシートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 薬用のお それ	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応薬忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化			
殺菌成分	塩酸クロルヘキシジン	グルコン酸塩として5%ヒビテン液	抗菌作用 (in vitro試験) ・広範囲の微生物に作用し、グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。 ・グラム陰性菌には比較的低濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。 ・芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。 ・結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。 ・真菌類の多くに抗菌力を示すが、全般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。 ・ウイルスに対する効力は確定していない。				ショック(0.1%未満)	0.1%未満(過敏症)		・クロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴 ・脳、腎臓、耳(内耳、中耳、外耳)(聴神経及び中枢神経)に対して直接使用した場合は、難聴、神経障害を来すことがある。 ・顔、膀胱、口腔等の粘膜面(ショック症状の発現が報告されている。) ・産婦人科用(膈・外陰部の消毒等)、泌尿器科用(膀胱・外性器の消毒等)には使用しない。 ・眼			・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・外用にのみ使用する。 ・眼に入らないように注意する。		本品は下記の濃度(グルコン酸クロルヘキシジンとして)に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 (使用例) ①手指・皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(30秒以上) 汚染時:0.5%水溶液(30秒以上)) ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈)(0.5%エタノール溶液) ③皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液(0.05%水溶液) ④医療用具の消毒 0.1~0.5%水溶液(本剤の50倍~10倍希釈)又は0.5%エタノール溶液(本剤の10倍希釈) (通常時:0.1%水溶液(10~30分) 汚染時:0.5%水溶液(30分以上)) 緊急時:0.5%エタノール溶液(2分以上)) ⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液(本剤の100倍希釈)(0.05%水溶液)		
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェンヒドラミン	外用はなし ジフェンヒドラミンはあり ーレスタミン コーワ軟膏	アレルギーを塗布または皮内注射したときに起こる発赤、腫脹、そう痒などのアレルギー性皮膚反応は、本剤の1回塗布により著明に抑制される。					頻度不明(過敏症)			炎症症状が強い渗出性の皮膚炎、適切な外用剤の使用でその炎症が軽減後もかゆみが残る場合に使用する。		使用部位:眼のまわりに使用しない。		通常、症状により適量を1日数回、患部に塗布または塗擦する。	麻疹疹、湿疹、小児ストロフルス、皮膚そう痒症、虫さされ	

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

ワークシートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づ く習慣性	適応禁忌 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量以上 過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果
殺菌成分	イオウ 日本薬局方 イオウ	イオウは皮膚 表面でも徐々に 硫化水素 やポリチオン 酸特にペンタ チオンとなり 抗菌作用を 現すので、寄 生虫性皮膚 疾患に奏効 する。また皮 膚角化に関 係があるとい われる-SH基 をS-Sに変え ることによっ て角質軟化 作用を呈す る。			頻度不明(皮 膚炎等)、頻 度不明(・長 期・大量使用 又は高濃度 の使用で皮 膚炎)	頻度不明 (過敏症状)		患部が化膿 しているなど 湿疹、びらん が著しい場 合には、あら かじめ適切な 処置を行った 後使用す ること。		腫には使用し ないこと。	・長期・大量 使用又は高 濃度の使用 で皮膚炎 ・長期間使用 しても症状の 改善が認め られない場合 には、改めて 診断し適切な 治療を行う ことが望まし い。		通常、3~10%の軟膏、懸 濁液又はローションとして1 日1~2回適量を患部に塗 布する。	疥癬、汗疱状 白癬、小水疱 性斑状白癬、 頑癬、頭部遠 在性白癬、黄 癬、乾癬、皰 瘡、脂漏、慢性 濕疹
	インプロピル メチルフェ ノール	フェノールを 使用	本剤は、使用 濃度において グラム陽性 菌、グラム陰 性菌、結核菌 には有効であ るが、芽胞 (炭疽菌、破 傷風菌等)及 び大部分の ウイルスに対 する効果は期 待できない。		頻度不明(過 敏症)		・損傷皮膚及び粘 膜(吸収され中 毒症状発現)			・原液または濃 度液が皮膚に付 着した場合には 腐蝕及び吸収さ れ、中毒症状を 起こすことがある ・眼に入らないよ うに注意すること。 ・本剤は必ず希 釈し、濃度に注 意して使用する こと。 ・炎症または鋭 刺激性の部位に 使用する場合は 、濃度に注意 して正常の部位 に使用するより 低濃度とすること が望ましい。 ・外用にのみ使 用すること。 ・密封包装、ギブ ス包帯、パックに 使用すると刺激 症状及び吸収さ れ、中毒症状が あらわれるおそ れがあるので、 使用しないこと。 ・長期間または 広範囲に使用し ないこと。[吸収 され、中毒症状 を起こすおそれ がある。] ・損傷を避けるた め、保管及び取 扱いには十分注 意すること。	長期間に使 用しないこ と。(吸収さ れ、中毒症状 の発現のお それ。)	効能・効果 用法・用量(本 品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェ ノールとして1.5~2%溶液 を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・ 家具・器具・物品などの消 毒:フェノールとして2~ 5%溶液を用いる。(20~ 50倍) 排泄物の消毒:フェノール として3~5%溶液を用い る。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 液(小児ストロフルスを含 む)、じん麻疹、虫さされ 液: フェノールとして1~2%溶 液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~ 5%軟膏を用いる。(20~ 50倍)		

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

ワークシートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応薬患	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点			併用薬品(他 剤との併用) により重大な問 題が発生する おそれ	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康障 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
エタノール	消毒用エタ ノール<ヤ クハン>	本剤は、使用 濃度において 栄養型細菌 (グラム陽性 菌、グラム陰 性菌)、酵母 菌、ウイルス 等には有効で あるが、芽胞 (炭疽菌、破 傷菌等)及び 一部のウイル スに対する 殺菌効果は 期待できな い。エタノー ルの殺菌力 上の最適濃 度については、その試験 方法により一 定しないが、 通常70%と称 してよく、この 濃度において は皮膚に對し て広敷及び 揮発性も過度 で、表皮を損 傷することも なく、無害で ある。					頻度不明(刺 激症状)	頻度不明(過 敏症)		損傷皮膚及び粘 膜(刺激)				・経口投与しない こと ・過量投与:全身 の熱感、味覚・嗅 覚機能の低下、 皮膚荒れを起 こすことがある ・顔面紅潮、発 汗、悪心、嘔吐、 急性胃炎、マロ リーワイス症候 群、口渇、利尿、 痛覚閾値の上 昇、呼吸促進、 心搏亢進、血圧 下降、多夢感、 眩暈、身体失 調、歩行困難、 急性アルコール 性ミオパチー、記 憶障害、感情不 安定、代謝性ア シドーシス、低血 糖、体温低下、 脱水、失禁、肝 機能障害、呼吸 抑制、昏睡(エタ ノールの血中濃 度が0.4~0.5% で呼吸停止が起 こる)、催眠剤と の同時服用や頭 部外傷の合併に も注意する。	・同一部位に 反復使用する 場合には、 脱脂等による 皮膚荒れを起 こすことが ある ・広範囲又は 長期間使用 した場合には、 蒸気の吸入 に注意する		本品をそのまま消毒部位 に塗布する。	手術・皮膚の 消毒 手術部位(手 術野)の皮膚 の消毒 医療用具の消 毒
殺菌成分	レゾルシン 「純生」	レゾルシン は、石炭酸と 同じ殺菌作 用があるが、 作用の強さは 石炭酸の1/3 である。 局所的にタン パク凝固作用 を有し、また 角質溶解作 用も有する。					・頻度不明 (頻脈等、胃 腸障害、悪心 等、めまい、 痙攣等、胃 障害、メヘ モグロビン血 症、粘液水腫 等)・長期連 用・大量使 用:経皮吸収 によりこのよ うな中毒症状 があらわれる ことがある) ・頻度不明 (真菌性・細 菌性感染症)	頻度不明(過 敏症)		・本剤に対し過敏 症の既往歴のある 患者 ・皮膚結核、真菌 性皮膚疾患、単純 性疱疹、種痘疹、 水痘の患者(症状 悪化) ・乳幼児(経皮吸 収による副作用発 現)			・腫及び眼の周 囲には使用しな いこと。 ・皮膚が徐々に はく離するよう使 用回数を制限す ること。 ・毛髪に使用す る際は、毛髪の 石けん分を洗い 落としてから使 用すること。	長期連用・大 量使用:経皮 吸収により、 頻脈等、胃腸 障害、悪心 等、めまい、 痙攣等、メヘ モグロビン血 症、粘液水腫 等の中毒症 状があらわ れることがある		2~5%の軟膏、水溶液又 はローションとして、適量を 1日1~2回塗布する。	殺菌、鎮痛、表皮はく離、角質 溶解剤として、 次の疾患に用 いる。 脂漏、脂漏性 湿疹、腋部 乾癬、尋常性 ざ瘡、牡癬性 脱毛症	

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

ワークシートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
		相互作用	併用注意				重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ				適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)
	ベシカム軟膏・クリーム	抗炎症・鎮痛作用を有し、抗炎症作用は、血管透過性亢進の抑制、白血球遊走抑制、プロスタグランジン類の生合成阻害、血小板凝集抑制、肉芽増殖抑制等の機序に基づくと考えられている。														
	イブプロフェンピコノール	ベシカム軟膏・クリーム														
	グリチルレチン酸	デルマクリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造がヒドロコチソンの化学構造に類似しているところによると推定される。													
	※殺菌成分、角質軟化成分	イオウ	日本薬局方イオウ	イオウは皮膚表面でも徐々に硫化水素やポリチオン酸特にペンタチオンとなり抗菌作用を現すので、寄生虫性皮膚疾患に奏効する。また皮膚角化に関係があるといわれる-SH基を-S-S-に変えることにより角質軟化作用を呈する。												

化膿性疾患用薬

製品群No. 56

ワークシートNo.36

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) 併用注意		重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ 薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に上限があるもの 過量使用・誤使用のおそれ 長期使用による健康被害のおそれ			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
※角質軟化成分	サリチル酸	サリチル酸	角質溶解作用・細胞間基質を溶解し、皮膚の剥離を促進して角質増殖皮膚を軟化させる作用がある。 防腐作用:微生物(白せん菌類など)に対して抗菌性があり、その防腐力、石炭酸に匹敵する。					頻度不明(頻赤、紅斑等の症状、長期・大量使用で内服・注射等全身投与の場合と同様な副作用)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、未熟児、新生児、乳児、小児	患部が化膿しているなど、湿潤、び爛が著しい場合、あらかじめ適切な処置を行った後使用。		広範囲の病巣に使用した場合:副作用があらわれやすいので注意して使用。 腫下用には使用しないこと。 長期・大量使用で内服、注射等全身投与の場合と同様な副作用発現のおそれ。 長期使用しても症状の改善が認められない場合:改めて診断し適切な治療を行うことが望ましい。		1. 通常サリチル酸として、5~10%の絆創膏を用い、2~5日ごとに取りかえる。 2. 次の濃度の軟膏剤又は液剤とし、1日1~2回塗布または散布する。小児:サリチル酸として0.1~3%、成人:サリチル酸として2~10%	1. 皮膚・顔面・四肢の角質剥離。 2. 乾癬、白癬(頭部洗剤性白癬、小水疱性斑状白癬、汗疱状白癬、頑癬)、乾癬、紅色乾癬、角化症(尋常性魚鱗癬、先天性魚鱗癬、毛孔性苔癬、先天性手掌足底角化症(腫)、ダリエー病、遠山園園状乾癬)、湿疹(角化を伴う)、口囲皮膚炎、掌跖膿疱症、アブラ乾癬、アトピー性皮膚炎、さ瘤、せつ、腋臭症、多汗症、その他角化性の皮膚疾患	
※殺菌成分、角質軟化成分	レゾルシン	レゾルシン「純生」	レゾルシンは、石炭酸と同じく殺菌作用があるが、作用の強さは石炭酸の1/3である。局所的にタンパク凝固作用を有し、また角質溶解作用も有する。					頻度不明(頻赤等、胃腸障害:悪心等、めまい、瘰れん等、腎障害、メヘモグロビン血症、粘液水腫等-長期連用-大量使用:経皮吸収によりこのような中毒症状があらわれることがある) 頻度不明(真菌性・細菌性感染症)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴のある患者 皮膚結核、真菌性皮膚疾患、単純性疱疹、種痘疹、水痘の患者(症状悪化) 乳幼児(経皮吸収による副作用発現)			-眼及び目の周囲には使用しないこと。 -皮膚が徐々にはく離するよう使用回数を制限すること。 -毛髪に使用する際は、毛髪を石けん分を洗い落としてから使用すること。	長期連用・大量使用:経皮吸収により、頻赤等、胃腸障害、悪心等、めまい、瘰れん等、腎障害、メヘモグロビン血症、粘液水腫等の中毒症状があらわれることがある		2~5%の軟膏、水溶液又はローションとして、適量を1日1~2回塗布する。	殺菌、鎮痛、表皮はく離、角質溶解剤として、次の疾患に用いる。 脂漏、脂漏性湿疹、腋部乾癬、尋常性ざ瘡、乾癬性脱毛症	

※ にきび治療薬